

令和3年度 霞ヶ浦学講座実践編「環境学習プログラムをデザインする」実施報告案

実施日時：令和4年3月16日（水）～3月28日（月） オンライン動画視聴

講師：小川達己（霞ヶ浦環境科学センター）

視聴申込者数：11名

講演：「環境学習プログラムをデザインする」

【学習内容「何を・・・行う」テーマ】

イベント企画・講座などの参加者に「気づいてもらいたいこと」、「伝えたいこと」が学習内容になります。環境学習の大きなテーマとして「自然とのつながり」、「社会とのつながり」、「人とのつながり」などがあげられます。また、最近ではSDGs（持続可能な開発目標）が取り上げられることが多いです。

霞ヶ浦に関しては環境学習のテーマとして、水質浄化、生物多様性、生態系サービス、水資源、治水、食、地質・地形、歴史といった環境科学から人文社会科学まで多様なテーマ、切り口が考えられます。

【「どのように・・・行う」学習方法】

学習内容が決まれば、「どのように」行うのか学習方法を考える必要があります。環境問題を学ぶためには多くの学習方法があります。講演以外にも見学、実習・創作（実験や工作）、調査（計測やインタビューなど）、ワークショップ（アイデアや課題を出し合う、シミュレーションをするなど）などの方法が学習の現場で活用されています。霞ヶ浦流域でも、実に多様な学習が行われてきており、体験学習など多くの方法が取り入れられています。（表1参照）

分類	内容など(一例)
講演(知る・気づく)	霞ヶ浦の概要、水質浄化、生態系サービス、治水・利水ほか
見学(ふれる) 見学場所など	霞ヶ浦船上観察、上・下水道施設、水質浄化施設、常陸川水門、横利根閘門、導水関連施設、用水機場、博物館・郷土資料館、水神、干拓地、貝塚、古墳、カキ化石床ほか
工作・創作・実習	投網、ろ過装置づくり、食用廃油で石けんづくり、アクリルたわしづくり、エコキャンドルづくり、間伐、枝打ち、外来植物駆除サイクリング、ゴミ拾いほか
調査(調べる)	水質調査、環境家計簿、霞ヶ浦の歴史（聞き取り）ほか
ワークショップ 考える・実践につなげる	（手法名）ランキング、タイムライン、イメージマップ ウェビング、フォトランゲッジほか

表1 「霞ヶ浦」を題材にした環境学習の例（方法を中心に分類）

【環境学習プログラムをデザインする】

プログラム作成の前段として地域の自然環境、都市環境、歴史・文化環境を把握しておくこと、環境保全に関連する施設・人材・団体などの関連情報を把握しておくことが大事です。霞ヶ浦および流域には多くの学習施設、環境保全団体があります。環境学習を行ううえでは、これら資源をうまく活用すると様々な学習を行うことができます。

環境学習プログラムをデザインするうえでの基本は、企画の立て方と同様で6W2Hの視点「なぜ」、「いつ」、「どこで」、「だれが」、「だれに」、「なにを」、「どのように」、「どれくらい」の経費で」をふまえることです。一般的に学習プログラムは「導入→展開→ふりかえり→わかちあい」という流れになります。より参加者の興味をそそるように導入部でひきつけ、本題を展開し、学習を広げ、深めていくような構成を考えます。「起承転結」や環境学

習の目標といわれている「気づき→理解→行動」の視点を盛り込むことも重要です。また、「in」、「about」、「for」という視点もあります。例えば、「霞ヶ浦で (in) 学ぶ・遊ぶ」「霞ヶ浦について (about) 学ぶ」「霞ヶ浦のために (for) できること学ぶ・実践する」と解釈するとよいでしょう。発達段階に応じてこれらの目的、学習方法を組み合わせていくことも重要です。具体的には下記のような構成になります。

回	展開 1	展開 2	目的・内容など
1	導入	気づき	テーマに関する気づきを得る。
2	展開	理解	テーマに関する基礎的な事柄を理解する。
3	展開	理解	調査や体験、見学などによって現状を実感する。
4	展開	行動	課題の解決に向けて方策を練る。
5	ふりかえり わかちあい		学びをふりかえる。他者と共有しあう。

プログラムが複数回にわたるようであれば、各回を関連させる、異なる視点から考える、自然がテーマであれば、季節ならではのものや旬をいかすといった時・場所・場合をふまえることも重要になってきます。